

吃り

著者	森本, 健吉
雑誌名	龍南
巻	2 0 1
ページ	6 4 - 7 7
発行年	1927-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2298/8942

吃

り

森 本 健 吉

庭には日の光がさして雀の聲も聞えるのに、一雄は床から起き上らうともせず、じつと考へ込んでゐた。弟はもう何處かに出て行つたらしい。寢床が抜け殻である。兄は流しでガーツペツと嗽ひをしてゐるやうだ。

彼は大きな欠伸をしてうんと手足を伸した。が又身體を縮めてしまつた。

寒い朝だ。それに今日は日曜だ。——と一雄は自分の心に辯解した。日曜日といふ言葉は二重の意味で彼の心に快い響を與へた。學校が休みだといふのと、吃らないでもいいといふのであつた。彼には寧ろ後の意味の方が重要であつた。

「吃り。吃り。」彼は恐しさうに心で繰返した。——

幼い頃遊びながらよく泣かされるのは彼だつた。泣かされて歸ると勝氣な叔母は自分の事のやうに立腹して外の子供を叱りつけた。そんな時叔母の後からそつと顔を出すやうな彼であつた。こんな憶病な天性に吃りといふ意識が結び付いて、一雄はどぶ鼠のやうにおどおどした、内氣な人間になつて行つた。かうして彼は中學校の四年生になつたのである。

一雄の内氣は彼の總ての進退に影響した。必要以上には滅多に話さず必要な事でも避けられるだけ避けて言つた。出来る事なら言はずに済ましたかつた。言ひさへすればきつと吃るにきまつてゐる。そして人の冷笑を浴びるに相違ない。かうした豫感に彼はいつも震へてゐた。一雄に取つては「言はざるは言ふにまさる」といふ譯も「雄辯は銀なり。無言は金なり。」といふ

金言も微妙な皮肉としが響かなかつた。

人の目色を窺ふといふ事はさもしい卑しいと心には思ひながら、一雄はそれを避ける事が出来なかつた。相手の目色に少しでも惻隱の情がほの見えと、彼は飢えた狼が食物に飛びつくやうにそれに縋りついた。それも弱い彼は自分から進んでする事は出来なかつた。唯相手がじつと垂れた同情の釣針が、一雄といふ憐れな魚を釣り上げてくれるまで、その釣針の周圍を泳ぎ廻るばかりだつた。そして幸に望が叶へば釣り上げられながら、魚は嬉しげにびく／＼と動いた。しかしそんな事は滅多に無かつた。

相手が堂々の論陣を張る時には、一雄は目を白黒して狼狽するのだつた。それは可笑しい程みじめな姿であつた。その癖彼はごく小さな子供や拙癖の人に對する時には、自分が吃であるといふ事を隠さう／＼とした。相手がつい知らずに居たら、もう一廉の雄辯家になつたやうな氣持で「無言の雄辯」振りを示さうとしたのだつた。しかし後で自分自身だけになると、吃である自分が飄然として意識に戻つてくると、彼はまた堪らなく寂しくなつた。そして自分の街氣がしみ／＼後悔された。

それでも一雄は吃の人を出来るだけ多く見付けようと思はずには居られなかつた。しかも成るべく著名な英傑の士が欲しかつた。どんなに多くの吃を見出さうとも、またその吃がどんな英傑の士であつても、それが直ちに自分の辯解になるのだとは思はなかつたけれど、やはりせめてもの慰めとして、一雄は自分の「同志」を求めずには居れなかつたのである。

それは目前に得られた。しかしさう英傑の士でもなかつたし、またさう多くもなかつた。

英語の教師の尾上先生は顔付も身體もでぶりと肥えた人で、その割に眼が細かつた。先生は自分がもとて吃であつた経験から吃りに惱む人には非常な好意と同情とを寄せて居た。それが一雄の眼にも歴然と認められた。先生は前の癖がまだのききらないと見えて、時々講義しながら口ごもつた。そんな時には綴の者は眼と眼で冷笑をかはしたり、わつと歡聲をあげて笑つたりした。しかし一雄は笑へなかつた。たとへつゝい笑ひに引き込まれても、自分も吃りであるといふ意識がすぐそれを揉み消

してしまふのだつた。

級中で吃るのは一雄の外に神田と西井とが居た。神田はよく奇想天外的な事を吃りながら言つては皆に笑はれた。しかし彼は見た所では吃るといふ事を一雄程氣に掛けて居ないやうだつた。寧ろ神田の吃りは彼を級中の名物男にしたのである。いつも豫感の恐しさに震へてゐる自分自身を顧みて、一雄は神田が羨しかつた。西井は一雄と同様に無口だつたが、彼には何處か沈鬱な所があつた。この三人がある日物理實驗室の前で日向ぼつこしてゐた。一雄の心の中には又例の街氣が湧き立とうとしたので、彼はあはててぐつと壓へつけた。すると急に悲しいやうな寂しいやうな氣持が起つてきた。一雄は神田にも西井にも打ち解けて「お互に吃りは苦しいね」でも言ひたいやうな衝動を感じた。彼にもう少しの決斷力があつたなら、彼はきつと同病に苦しむ友達の手を握つた事だらう。しかし彼の生來の内氣が彼を引き止めてしまつた。三人とも銘々自分自身の瞑想に耽つてゐた。三つの若い魂が同じ悩みを抱きながら、離れよう／＼と努めてゐるのを、一雄は痛々しく思はずには居られなかつた。——彼はほつと吐息を付いた。そして澁々と起き上つた。

二

その翌日の月曜日の正午。

午後の一時間目は英語だといふので、一雄の組の者はあちらこちらに集り合つて豫習に餘念が無かつた。「單語もひいて來なかつた。」と言ふ者もある。「今日の所は特別にひねくれてゐる」といふ者もある。その中でも英語のうまい杉山の周圍には五六人群つて、ちやうど大學の講義を聞かうとあせる學生のやうに、互にひしめき騒いで居た。杉山は發音も譯讀も黒人くろうとのやうに巧妙だつたので、言はば組での權威であつた。

「お〜。この which は何處にかゝる〜」

「それか。それは「*on the*」の *that* にかゝるんだ。 *that*……*which* や *what* と *is* の意味になるよ。」

「あゝそうか。」

「ちよつとく。この *is* は何？」

「えゝと……。あゝそうか。その前の文全体を受けるのさ。(本を讀みながら)かうくするのはいい事だと述べたが——それはといふ文勢だよ。」

「ふーむ。」

「あの、おい。濟まんがそこ全部譯してくれないか。少しも續き工合が分らんのだ。」

皆が唯その場だけの埋合はせをつける爲めに、生き辭引の杉山から智識をひつたくらうと努めてゐた。一雄は例の物理實驗室の前でぼんやり立つてゐた。そして自分だけ全宇宙から突き離されたやうなものの寂しさが、ひし／＼と身に迫るのを感じた。彼の周りには誰も集つては來なかつた。ほんの一人か二人長い文章の所を質問に來たが、彼が顔を眞紅にして吃りながら説明するので、聞く方では少しも譯が分らなかつた。でもちつと注意深く相手が聞いてくれる事もあつた。そんな時にも相手の沈黙が自分の説明のまだるさを、暗に催促してゐるやうな氣がして、彼は狼てふために言ふのだつた。中には一雄の説明を聞きながら欠伸を洩らす者も居た。そんな時に一雄のどぎまぎする様子は可笑しい位みじめなものであつた。

彼は「大抵「知らぬ」と言つて逃れようとした。知らないと言ひさへすれば彼は總ての説明の義務を免れ得ると思つたからである。然し心の中では自分自身の臆病さを——喧嘩しない前にすぐ尻尾を卷いてこそ——と逃げ出す小犬のやうな内氣さを——憐れみずには居られなかつた。でも時には「知つてゐるだけでいいから是非やつてくれ。」と迫られるのだつた。すると一雄は胸をどき／＼させながら、恨めしさうに英字を見つめて譯し初めた。狼狽の餘り彼は「といふ字の譯にすら言ひ吃つた。」を、そ……それはツ……」と血を吐くやうな思ひで言葉をつき出した。友達の中にはすぐ氣をきかせて「ふん、ふん。それはといふ

のだね。してそれから……」と靜かに言葉を續いでやる者も居た。でも意地の悪い者は「おい／＼早くやつてくれないか。それがどうするのだい。まだ分らぬ所が澤山あるから早く言つてくれ。」とせき立てた。一雄は泣きたくなるのをぢつと堪へてあせり出す。ます／＼言葉は出なくなる。遂には友達に投げ出すやうに「あゝもういいよ。」と言ひ棄てて去る。彼はその冷かなお禮の言葉をさへ、蘇つたやうな氣持で受取るのだつた。――

杉山を中心にした群はまだ騒いでゐた。その時始業の鐘が鳴つた。

その時間に一雄は當らねばいいかと望んでゐた。何となく口がこはばつて言葉が出ないやうな豫感がして堪らなかつた。日頃親しまれた先生さへ恐しく思はれた。しかし三人目に到頭當てられてしまつた。

彼は立ち上りざまにすぐ讀み初めた。それが餘り突然だつたので皆わつと笑ひ出した。しかし一雄は一生懸命だつた。急勾配を轉げ落ちる小石のやうに、後から／＼と大きな力で押し進められる氣持で、息も切らずに讀み續けた。そして句切りまで來ると又すぐ譯し初めた。今度は皆あつけに取られて黙つてゐた。

この儘順風に帆かけて流れて行きたい、と一雄は心の中で念じてゐた。吃り、吃りと耳の奥の方で囁く聲を、拂ひのけよう／＼と努めながら彼は譯して行つた。が一雄の譯は「圖書館」といふ字にぶつつかつた。トシヨクワン――あの嫌な爆發音の文字だ。しまつたと思つた刹那に彼はもう恐しい暗礁に乗り上げて居た。と耳もとで吃りと大きな叫びが響いた。來るべきものが遂に來てしまつた。彼はかう思つてどきりと胸を打たれた。

先生も友達も耳を傾けて聞いてゐるのだ。早く言はねばならぬ。かう思ふと例のあせり氣味がまた頭を擡げて來た。圖書館――たつたそれだけの言葉だ。確かに知つてゐる。たゞ口で言ひ現せばいいのだ。早く言へ／＼と圖書館といふ文字が迫つてくるやうな氣がする。でもあせればあせる程ものが言へなかつた。

頭がぼんやりなつてくる。我とも人とも見當がつかなくなる。舌がこはばつてしまつた。鋼鐵のやうにとつしり座つて動

かうとはしない。耳もとで吃り吃りと嘲るやうな聲が聞える。兩頬が火のやうに熱くなつた。眞赤に燃え立つてくる。目がひきつた。目蓋の兩方から引つばられるやうな氣がする。——何時しか不覺の涙さへ浮んできた。

教室内には重苦しい沈黙が漲つてゐた。驚いた眼、嘲る眼、憐れむ眼、悲しむ眼、殆んど無表情になつた眼——皆一様に一雄の全身に飛礫のやうに投げ掛けられた。その中に立つて一雄は獨りで跪いた。頭を振る。手を動かす。足踏みをする。そして圖書館といふ一つの言葉を言ひ現はさうと苦しんだ。

「と、と、と……」彼は喘ぐように言ひ出した。汽車の吐息のやうなその斷片の言葉は可笑さを越えて寧ろ悲壯だつた。教師は見かねて一雄に着席を許した。蘇つたやうな氣持と、解放された囚人のやうなみじめな、やるせない思とが一雄の胸をついた。彼は大きな聲を張り上げて思ふ存分泣きたかつた。しかし四方八方からの冷かな視線を浴びると彼はまたたたくとなつた。そして首をうなだれてしまつた。

三

歸つてきて書齋に引き籠り、一雄はじつと考へた。何故吃るのだらう、いや何故吃らねばならないのだらう、と反問して見ただれど何等の解答も得なかつた。やはり吃るから仕方がない、といふ寂しい諦めに避難するより外は無かつた。

やがて彼は雄辯な人が憎くて堪らないやうになつた。あんな人が居るから吃が一層苦しくなるのだ。慘酷な位猛烈に雄辯な口はべら／＼喋り出す。後から／＼と繰り出すやうに話し立てる。よくあんなに言葉が言へるものだ。しかしあれもつまらないと言はうとして一雄はつと言ひつまつた。一言も言へない吃の方がもつとつまらぬやうに感じた。——やはり雄辯の方がいいと彼は思つた。

何故吃るのだらうと一雄はまた呟いた。

母に訊ねて見ると何故だらうねと沈んで答へた。兄も友も軽い溜息より外には彼に與へてくれなかつた。やはり自分一人で解決しなければならぬのだ。一雄は心細くなつた。

それから二、三日してから、醫者の伊藤さんに聞いたらといふ考へが起つた。

初め彼はちよつと躊躇した。第一獨りで行くのが少しきまりが悪かつた。それに尋ねるのが餘り變な質問ではなからうか——「私はどうして吃るでせうか。」とは。また明瞭に自分の趣意を言へるだらうか。こんな心配が内氣な心を脅した。しかし結局自分自身の事ではないか、と思ふと一雄は澁々ながら決心せざるを得なかつた。まだ六時かそこらだつたが冬の日はまだ薄暗かつた。

着いて見ると薄明るい電燈を浴びて、伊藤さんは獨りで椅子に腰をおろして新聞を讀んでゐた。外にその診察室には誰も居なかつたので、一雄はちよつとほつとした。

「ほう、珍らしい。どうかあるのかい。」醫者は一雄を見るとかう呼びかけた。彼は一雄の家の者とは親しくしてゐるので言葉付きも馴々しかつた。

「はあ………あの。」一雄は機先を制せられてどぎまぎしたが、こゝだと思つてやつとの事で一息きに言つた。
「吃はどうすれば直りますか。」

伊藤さんはちよつと驚いた。その言葉の内容と發言の方法とが餘り意外だつたからである。

「吃——誰が？君が？」と少しせき込んで聞いた。

「はあ。」一雄は赤くなりながら答へた。

「ふむ。さうか。」と伊藤さんは少し考へながら一雄の顔を見つめた。彼は思はずうつ向いた。

「吃りつて、君は少しも吃らないじやないか。」

「いゝえ、吃ります。」

伊藤さんは妙な顔をした。

「ふん。しかしね、吃にも幾種類があるのだ。軽いのはある音に限つて吃るのだ。例へばカといふ音で言へばカツ、パなどいふ言葉を言ふのに、そんな人は苦しむんだね。それはその音を避けて言ふか、又はその発音を出來るだけよく練習するといふよ。君のはさうかい。」

「さあ、どうだか。」

「さうか。とにかくカ、カ、カ、……と連續的に吃るのは、どつちかと言へば軽い方だね。それなら練習さへすると大抵直るよ。重いものになると一度言ひつまつたらちよつとすぐ出て來ないのがある。それがひどくなれば啞に近くなるのかも知れぬ。僕はその専門ではないから精しくは知らないがね。」

「私のはどつちもです。」

醫者は一寸驚いたやうに、一雄を見て居たがやがて言つた。

「君はとにかく臆病すぎるね。」

一雄はメスで挟られたやうにどきりとした。

「そうかも知れませんか。」と語尾をにこした。

「さうだ。もつと氣を大きく持つ事だ。何だね、吃といふのは言はば一種の恐怖病だよ。言葉が何となく恐いやうな氣がするだらう、君は。」

「はあ。」

「さうだらう。それだから吃るのだ。何時も吃りはしないだらうかとばかりよく考へてゐるから餘計吃るやうになるよ。」

きつと自由になるのが言へると確信して御覽。そしたらきつと段々よくなるよ。」

伊藤さんの顔は、電燈に照らされながら、引き締まつてきた。

「それで思ひ出した。僕等の中學の時吃の人が一人居たがね。そりやよく出来る人だつたが、吃に悩まされて何時も寂しさうにして居た。等僕も實際氣の毒だと思つたよ。その人は随分自分で苦しんだらしい。よく知らないが、いつそ死なうといふ所まで行つて練習したさうだ。そこになるともう意志の力だ。到頭吃を自分で直してしまつた。僕が東大の醫科に居た時分に、その人は法科には入つてゐたが、今では何處か地方の縣知事になつてゐるよ。そしてもう不自由なく話せると言つてゐた。――まあ、そんな人もあるよ。」

伊藤さんは落付いて、すら／＼話した。話しながら少し昂奮してくるのを、醫者らしい冷靜さでぐつと制してゐた。

「だから吃だつてさう悲觀するには及ばないよ。その中にきつと直る。それまでは自分の意志の試金石だと思へばいいじゃないか。それに誰にだつて悩みはあるよ。君よりもつと苦しい悩を持つてゐる人もある。きつとある。僕の商賣が商賣だから、色々そんな人を見受けるがね。君は身體が割合に強いから分るまいが、ひどい病人の身になつて御覽。随分苦しいよ。そんな事思ふと吃りなんて何でもないさ。」

一雄は益々何時もの伊藤さんとはちがふと思つた。その眞面目さが彼の心に徹えた。それで「はあさうです。」と思はず畏つて答へた。

醫者は顔の緊張をゆるめて、宥めるやうに笑つた。

「ははい。いやに埋窟になつたね。とにかく吃りなどにく／＼するのは止める事だね。まあ具体的には出来るだけ、呼吸を平靜に長くする習慣をつけるといいと思ふ。餘りせいてと／＼息を止切れ／＼に出すから吃るのだね。よく落付いて平氣で言ふ事だ。」

「吃ると笑はれると思つて……」

「それがいけないんだ。笑はれたつていいのだ。君、男一匹が笑はれる位何だ。そんな氣持を止めてしまふのが第一だ。」

「はあ」と答へて暫くじつとしてゐたが、やがて、

「色々難儀御座いました。」と彼は頭を下げた。

「もう歸るのかね。トや又來給へ。君等はまだ若いんだ。元氣を出すんだね、元氣を。はは……。」

彼は丁寧にも一度禮をしてその病院を出た。

もう外は眞暗になつてゐた。彼は軽い昂奮を身を感じながら家に向つて歩いて行つた。そして心の中で伊藤さんの言葉を繰り返して見た。

「吃——試金石——意志の力だ。」

四

その翌日一雄また吃つた。

吃は彼が忘れよう／＼と努めても、意地悪く彼の口にこびり付いた。寧ろ離さう／＼と蹴くが故に、益々執拗に彼の頸を締め付けたのだつた。彼はそれを餘りに明瞭に知つてゐた。そして知つてゐるといふ意識がまた彼を一層いらだたせた。いつそ意識さへなかつたら——彼はこんな事を考へる時もある。しかし意識を滅却しやうとすれば勢ひ總ての感覺を殺さねばならぬ。遂には意識する自己自身の存在さへ否定せねばならない筈である。でも一雄は唯吃といふ意識のみを頭腦から追拂ひたかつた。その他の感覺は皆生かしたかつた。實際彼の感受性は病的な位鋭敏な事があつた。又自己といふものがよく分りもせず、むやみに存在を主張したかつた。死といふ問題もこれまで眞面目に考へて見た事はなかつた。彼が幼い頃獨りの妹が死

んだが、その時の事は餘り強烈に彼の頭腦に刻み込まれてゐなかつた。唯中學校の四年生になるまでに讀んだ書物の中から、ごく概念的に死といふ意味を知つただけだつた。死を深刻に考へなかつた彼に、生が痛切に觀照される筈はなかつた。唯生れたから生きてゐる位の感じしか持たなかつた。もつと極言すれば、生きねば損だと思つてゐた。それだから吃といふ意識を滅却するために、自己の存在を否定するなどは夢にも思つて居なかつた。結局、唯吃の意識だけを無くするといふ彼の考へは、餘り虫がよすぎた。

伊藤さんの言葉を聞いた時、一雄はその虫のいい考が實現されると思つた。吃の意識を踏みつけるのだ。ぐつとそれより上に超越するのだ。それには意志の力だ。と彼は醫者の言つた通りの言葉を繰返した。そして急に元氣付いて歸つてきたのだつた。

それに今日また吃つた。息苦しい程吃つた。彼は横面をはられたやうな氣がした。伊藤さんの言つた事は尤もだと感じながら、その親切な心盡しを謝しながら、欺された、誰かに欺されたといふ氣持がしてならなかつた。初めはかうも思つた。――醫者の藥でもすぐ効果を表はしはすまい。二三日經つ中に何時の藥が効いたのか分らずに段々病勢がよくなる。吃でも同じだらう。昨日聞いてすぐ今日直るものか。その中に直るだらう。と思つた。そして「吃はきつと後で直るよ」といふ伊藤さんの言葉に縋らうとした。が彼は藥の中でもすぐ効を奏するやうな熱さましが欲しかつた。自分は昨晚確かにその熱さましを飲まされたと思つた。それに良くならないばかりか、却つてひどくなつたやうな氣がする。欺された――嫌な言葉だが――確かに欺された。かう思ふと一雄は頭の中がにえ返るやうだつた。

家に歸つても無言の儘で書齋に入つた。靜かな室の中がいつもより一層寂しかつた。

考へは同じ所をどうど廻りをしてゐた。ぐつたり疲れてへたばると、また吃がせき立てた。しかし結局「癪だ。癪だ。」といふ呪になつた。そしてぽろ／＼と涙が流れ落ちた。彼はうつ伏しになつて吸り泣き初めた。

それから暫くして誰か室に入つてくる氣配がした。一雄は猶泣き續けてゐた。しばらくその人は黙つて立つてゐた。

「どうかしたかい。」

母だなど彼は直感した。彼の鋭敏になつた聽神經は、母の聲が少し震へてゐるのを聞き洩さなかつた。が彼は返事をしなかつた。

「どうか……、」聲がまた訊ねようとした時、彼は激しく泣き出した。「泣けるだけ泣いて見ろ。」といふ心持がむら／＼と起つてきた。

母の聲は段々くもつた。やがて何か紙袋に入れたものをそつと机の上に置くと、靜かに出て行つた。出しながら一度ふり返つて見たが、一雄はうつ伏した儘であつた。

母の足音が消えてから、彼は靜かに顔をあげた。眼の縁が少し泣き腫れてゐた。彼の眼はすぐ机の上の紙袋に注がれた。そつと開いて見ると、四つ目饅頭が五つ六つ入つてゐた。彼は別に食ひたいとは思はなかつたが、一つ頬張つて見ると存外甘かつたので、二つ三つと食ひ續けた。

彼にある意識が湧き立つてきたのは此の時だつた。

「母だ。母なればこそ……。」彼は饅頭を頬張りながらまた涙が滲んできた。

やがて昂奮した氣分が鎮まると、彼は暫くぼんやりと机の上に頬杖をついてゐた。

「自分は何つと強くならねば駄目だ。」彼はかうしみ／＼思つた。――

第二學期試験が始つた。それが終ると冬期休暇に入つた。手洗水が氷るやうな日が續いた。年が明けた。一雄は自分の心が少しづつ變つてゆくのを覺えた。

休暇が終つてから始めて吃驚したのは杉山の頓死であつた。昨年のごく押つまつた日に、ある書店で杉山と遭つて話した事があるだけに、一雄は誰よりもひどいショックを受けた。始めは嘘だらうと思つてゐたが、段々事實である事が明白になつてくると、彼は暫く氣抜けしたやうになつた。

二三目してから彼も亦腸チブスに罹つた。熱は何時も三十八度を上下した。夢現の中に謔言を口走つた。意識はぼんやりなつてゐた。唯、耳の奥で何かごとごとといふ、ラヂオの雑音のやうな物騒しさが聞えた。この十數年來病氣した事がないので、こんな重い病氣に襲はれると、一雄はすっかり疲れてしまつた。それに毎日流動物のごく少量づつしか許されないのだから、けつそり瘦せた。

毎日天井ばかり見て居た。藥を飲むにしても、管から吸ひ込んだ。長い間横になつたきりなので、腰が痛んで堪らなかつたが絶對安靜を命ぜられたので、手も足も殆んど同じ處に置きつきりであつた。時々眠氣がさすと晝も晩も差別なく眠つた。醒めて見ると何處かで雀の鳴く聲が聞えて、朝だなどと思ふ事もあつた。が目が開くとすぐ見えるのは、天井板の單調な色であつた。でも朝はまだよかつた。どうかすると、深更に獨り目が醒めた。すると魔はれでもしたやうに、びつしよりと汗かいてゐた。額に手を當てると、生温いぬる／＼とした感じがした。人の寢息がす／＼と聞えてくる。生きてゐるといふより、死んだ人が息を付いてゐるやうだ。人間は寝るとき一時死ぬのではないかしら。——一雄はいやな氣になつた。あたりが餘りしんとしてゐるので、自分の床に寝て居ながら何となく無氣味だつた。杉山が死んだ——妹が死んだ——いやだ。死にたくない。何と言つても死にたくない。彼は堪らなくなつて、「お母さん」と呼んだ。……………

目が醒めると、雀のちゅん／＼言ふ聲がする。一雄は思はずほつとした。毎日々々が淡い灰色を帯びてゐた。

時々何となく胸一杯になるやうな思が起つてきた。自分獨りとり残して、皆の人がさつさと走つてゆくやうにも感ぜられた

幼い頃、悪太郎から擲られて泣いた自分が、朧氣ながら思出された。何故この世に自分は生れてきたのだらう、とも考へた。こんな斷想が、とりとめもなく、彼の頭に浮んだ。そして何時の間にか、涙ぐんでゐる事があつた。

が、一雄は自分の心が次第に落付いてゆくのが分つた。病人の動きのない生活が心を鎮めたのかしら、とも思つた。静かな部屋の氣分が心に融け込んだのかしら、とも思つた。時々、心の奥の奥まで、ずーつと滲みこんでゆくやうな、深い大きな何かが、心の中に潜んでゐるのではないかしら、とも思はれた。そしてふと「吃はきつと直るよ」といふ、伊藤さんの言葉が思ひ合された。――

母は彼の枕邊に座つてゐた。そして「お藥」と言ひながら管を彼の口に入れた。一雄は、母の乳房に縋る幼児の様に、ちゅつ／＼と藥を吸ひ込んだ。

膚寒い午後であつた。